

月尋堂の歌学書『和歌俗説辨』

— 翻刻と解題 —

藤原英城

はじめに

元禄期前後は出版歌学書が輩出した時期であったが、その夥しい出版歌学書群の中に、浮世草子作者として知られる月尋堂の手になるものが見いだされる。月尋堂の歌学書としては『和歌俗説辨』（正徳二年正月刊）『歌道名目抄』（正徳三年正月刊）『和歌名所詠格』（同年三月刊）の三作が推定され、さらに『官職田舎辨疑』（宝永八年三月刊）なる有職故実書の著作も確認できるが、これらはいずれもこれまで知られていなかった月尋堂の文学活動の一面、すなわち和学者としての月尋堂の一面を物語る。

本稿はそうした知られざる和学者としての活動を示す月尋堂の出版歌学書の内、その嚆矢と見られる『和歌俗説辨』の翻刻と解題である。

〔書誌〕

和歌俗説辨 刊本 半紙本 三卷三冊

表紙 縹色無地、雲霞に秋草洪引模様原表紙。縦二二・二糎横

一五・九糎。

本文 四周单边。縦一七・八糎横一三・〇糎。半丁一〇行毎行一八字前後。

構成 卷上 二三丁半（序一丁「一」、目録一丁「一」、本文二二丁半「二」〜二十三「表」）。

卷中 二二丁半（目録一丁「一」、本文二一丁半「二」〜二十三「表」）。

卷下 二〇丁（目録一丁「一」、本文一九丁「二」〜二十「刊記欠」。備考参照。

挿絵 卷上 半丁六面（五オ・ウ、十一オ・ウ、十七オ・ウ）。
卷中 半丁六面（五オ・ウ、十一オ・ウ、十七オ・ウ）。
卷下 半丁六面（五オ・ウ、十オ・ウ、十六オ・ウ）。

題簽 中央、薄茶布目地金箔散らし、後題簽書き外題「和歌俗説辨

上」「和謂俗説辨 中」「和哥俗説弁 下」。備考参照。
序題 「和謂俗説辨序」。

目録題 「和歌俗説辨卷上（中）目録」「和哥俗説辨卷下目録」。
内題 「和歌俗説辨卷上（中）」「和哥俗説辨卷下」。

尾題 「和歌俗説辨卷上（中）終」、卷下なし。

板心序「序丁付」、目録・本文「上・(中・下)丁付」。いずれも

板心下部の丁付の直前に「序」「上(中・下)」と記される。

ただし、巻上「十、十二、十四」は丸囲みなく「上丁付」。

句読なし。

作者 宵雨軒月尋堂(推定)。

画者 未詳。

所蔵者 京都府立大学附属図書館(911:102/W/1)。

刊記 欠。備考参照。

備考 底本には原題簽、奥付(刊記)が欠落しているため、東京国立博物館蔵本によって次に記す。

立博物館蔵本によって次に記す。

題簽 中央、茶無地原題簽「絵入／和歌俗説辨 上」「和哥

俗説辨 中」「和哥俗説辨 下」。角書は団扇文様。

刊記 「正徳二年壬辰正月吉日／京寺町松原上ル町／菱屋

四郎右衛門板行」(裏表紙オモテに半丁貼付。板心は「○(丁

付なし)」)。

なお翻刻にあたり、虫損等により判読が困難な箇所について

は、京都大学文学部蔵本によって補った。

諸本 ○正徳二年正月 京・菱屋四郎右衛門刊行本

刊記「正徳二年壬辰正月吉日／京寺町松原上ル町／菱屋四郎

右衛門板行」。

東京国立博物館、東北大学附属図書館狩野文庫、佐賀大学附

属図書館鍋島文庫、早稲田大学図書館千厩文庫、宮城県立図

書館伊達文庫、石川県立図書館李花亭文庫、住吉大社御文庫

蔵本(以上、三卷三冊)、京都大学文学部蔵本(三卷合一冊)。

○刊記不明

底本(三卷三冊)、初瀬川文庫(二卷二冊、巻下欠)。

底本は巻下裏表紙オモテの奥付が貼付されるべき半丁が剥落

しているが、表紙が東京国立博物館蔵本と共通し、匡郭の寸

法や刷りの状態などから判断して、正徳二年板と推定される。

〔翻刻〕

一、翻刻にあたっては、原則として現行通用の字体に改めた。ただし、

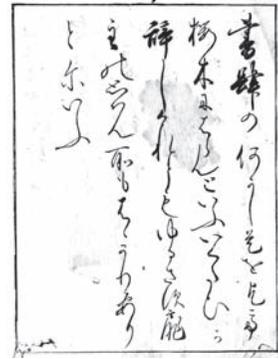
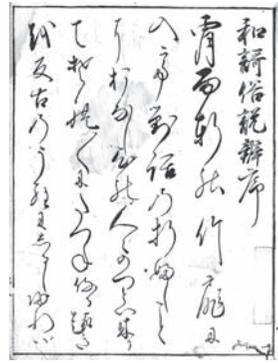
当時慣用と思われる漢字表記などについては、そのまま残したもの

もある。

一、丁移りは、丁付と表・裏(オ・ウ)を括弧に入れて示した。

一、衍字・脱字や改行等の不体裁については(ママ)と注記し、注記

内容を記したものもある。



和歌俗説辨序

宵雨軒の竹扉に入て對話の折ふしことにおなし心の人々のつとい来りてそれくにとたつね侍る趣きを反古のうらにしろし帰れば(序一オ)
書肆の何かし是を乞て桜木にはらんといふいくたひか辞しけれともゆるさす扉主の思はん所もは、かりありと尔いふ(序一ウ)

和歌俗説辨卷上目録

- ① 船をしぞ思ふ事
- ② かたをなみの事
- ③ 尾上の桜の事
- ④ 三室の山紅葉、の事
- ⑤ 心にもあらて憂世の事 (一オ)
- ⑥ 春の心はの事
- ⑦ 久かたの雲井の事

- ⑧ いでそよ人の事
- ⑨ 雲の簾手の事
- ⑩ 我世のいたくの事
- ⑪ 声きく時ぞの事 (一ウ)

和歌俗説辨卷上

① 船をしぞ思ふの事 柿本人麿

古今

ほのくくと明石の浦の朝霧に鳥かくれ行舟をしぞ思ふ

此哥はことに凡慮の及ひかたき所あるよし古来よりいひつたへ侍るさるにても人丸明石の浦の漕はなる、舟の鳥かくれ行有さまをはるかに御覽して人間生死の趣きかくのときぞと観念し給ひ悟りの躰を絵にも写して寺社の絵馬にも奉り侍る (二オ)

いかにも世の变化をみる事は四時の榮枯朝夕の有さまにもある事なれば明石の浦の船にかざる事にも有べからず其上此歌を思ひあやまつて田舎の人をまどはしよこしまの道に引入聖意をそこなふやから世に多し先此哥を古今集卷九鞆旅の部に題しらすと入たる事をしらぬがゆへ成べしひたすら舟惜ぞ思ふととなへあやまるゆへ浅ましき僻事を釈して本理を失ふ惣じて鞆旅といふは二日や三日の旅する事にあらず (二ウ) 随分遠く日をかさね行旅の事也扱哥の心はこともおろかや四条大納言公任卿和哥九品の論儀にも此哥を上品上生にたて給ひ子細言舌にのべがたきよし公任卿も三年此歌を工夫し案し

得たりとの給へるをいさ、か注釈を付侍る事は勿躰なき事なからいつまでも田舎の人の思ひ誤る事わりなく覚へ侍れば卒尔にかたはしをいひのぶるもの也ほのくとは夜のほのかに明はなる、心をすなはち所の名に(三才)いひかけて朝霧とつゞけ島がくれ行と請たる詞つかい誠に凡慮の及ふへき所にあらず扱舟をしご思ふといふか殊に此歌の眼也此哥は柿本人丸もろこしへわたり給ふ時明石の浦を過るとてよみ給へりしかるによその船のはるかに島かくれ行を朝霧のひまより詠めやりてよみ給ふやうに心得るゆへにあやまりて無下の事をの、しり浅ましくも人のはずかしめをうくるぞかし船をしご思ふのし文字は助(三ウ)字にて船をぞ思ふといふ事人丸入唐の事は拾遺集にも其よししるされたり万葉にも人丸の明石の浦の哥多しへともし火の明石の灘に入日や漕別れなん家わたりみゆへ天さがるひなのなかちを恋くれは明石のとまり大和島みゆ此哥と同じ時よみ給へる哥の万葉にもれたるを古今集に入られたりかならずくよその舟を見てよめる歌にあらず人丸のみつからのり給へる舟の明石の浦を漕行を思ひ給ふ哥也その島といふは此浦の沖にくらかけ(四才)島ふたこ島みなををし島とてみつの島ならびて風景たぐみなき島くをこぎかくれ行舟を思ふといふ事也くれく舟惜とは至極の僻事ちかごろ文盲の注釈ぞかし其子細は古今集の部立にて能々心得へし俗説のことくならば眺望の哥にて只雑たるべきに何とて貫之は鞆旅の部には入られしぞいかにおろかなる人の諾はとて貫之の撰をいひけしうちやぶりて哥の理をたつるなどは冠に糞する蠅のごとし(四ウ)

挿絵第一図(五才)

「あかしのうら人丸入唐」

挿絵第二図(五ウ)

「紀伊のくにへ御幸わかの浦の景」

扱もおそろしき注釈にてそ侍る能くわきまへしり給へかし

①かたをなみの事 山辺赤人

和かの浦にしほみちくれはかたをなみ芦辺をさして田鶴鳴わたる

惣して波に男波女波とてありしかるに和哥の浦にかぎりてをなみは

かりうちて女波はうたさるゆへ此所の名譽とし侍る又方をなみとも

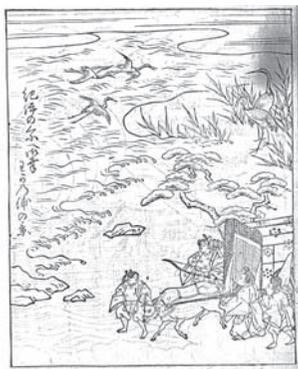
此哥を注釈し侍るいつれか哥の理にかあひ侍る事にや

いかさまにもあやまりもふるくいひつたへ侍れ(六才)ば何とやら

似かよふものにて和哥のうらの波は男波といふべきやうなる波はか

りうちてつゞるてうつなみの女波といふへきやうの波うたさるは所

の風によつてかくあるにや扱万葉集第二柿本人丸の長歌にへいわ



みの海津の、うらはは浦なみと人こそ見らめかたをなみと人こそ見
らめよしえやし浦はなくともよしえやしかたはなくともとよめる是
も俗説のごとくにいは、石見国角の、浦にもめなみはなくてをなみ
ばかり（六ウ）うつにや僻事を以て哥の理を失ひ扱もあたら和かの
浦の風景をいひあやまるは無下に文旨の至りぞかし此哥は万葉第六
にみゆ神亀元年 甲子冬十月 幸 于紀伊国 一時とありすなはち瀟乎
無美と書りされは歌の心は和哥の浦の干海にゐる田鶴のしほみちき
たりて其干海がなくなればあしべをさして鳴行といふ事也あし辺に
は田鶴もゐにくからめと海がなくなればかなはで鳴わたる眼前の景
色をありくくとよめる哥也（七オ）又かたをなみのかたの字を方と
心得ていつくともなく鳴わたることほりと訳したる説も万葉の心に
叶ず其うへ万葉にかたをなみはかりを和哥浦に読合せす
かなは

第七

へ和哥の浦に白波たちて奥津風寒き夕へは大和しそ思え

第十二

へ和哥の浦に袖さへぬれて忘れ貝拾ふと妹は忘れられなくに

これにて能々心得へき事也くれく此哥は片男波といふ儀にあらす
又方をなみといふにもあらす汚ないといふ儀也

③尾上の桜の事 権中納言匡房（七ウ）

後拾遺

高砂の尾上の桜咲にけり外山の霞た、すもあらなん
此哥播州高砂の尾上の桜咲みたれ侍れば外の山の霞もたな引事なく

たゞ一面に花に成て春の景色もおもしろく侍るされ共尾上のあたり
にてはいづれの桜をよみ侍りしにや

高砂といひおのへといひ播州にある所の名にしてしかもあたりちか
く侍ればさやうにまきはしく沙汰し侍るは例の田舎沙汰にてさら
に理をわきまへぬ注釈ぞかし高砂と（八オ）いふはいづくにても山
の惣名にて高いといふ事也尾上といふも峰の事にて山の尾のうへと
いふ事也かならず播州の高砂尾上にかぎりたる事にあらず又外山と
いふはひくき山をいふ也春の蒙氣にて高い山もひくい山も霞こめた
るに如月の末にははや高い山の桜咲みつればなをかしひくい山の霞
もた、ずみなさくら咲たるにこそ有らんといふ詞つかい神妙の哥
也此哥は遙望二山 桜一といふ題にてよみ給ふ哥也能々是にて（八
ウ）心得べしくくれく播州の名所にはあらず是らを作例と思ひはり
まの高砂尾上にひたすら桜をよみつゞけんと思ふはあやまり成べし

④三室の山の紅葉、の事 能因法師

後拾遺

嵐吹三室の山の紅葉、は立田の川のにしきなりけり

此哥の心はみむろの山に嵐吹は紅葉、ながれ来りて立田の河のにし
きと見ゆる事ちるといはでながれきたりたる風情をもたせたる事
粉骨とつたへ侍る（九オ）

いかにもちるといふ詞をぬくといふにはあらねど自然とちるときこ
ゆるうへにちるの字があつてのなくつてのといふ事さらに侍らず其上
さやうに上の句より義理をすましぬれば幽玄にもあらず詞と心と別

く成て一首のたけひくふ成侍る也哥のよみかたをわきまへぬから古哥の義理もうへしたに取はづしてあらぬ所に穿鑿せんさくをいゝ事尤田舎沙汰也まつ此立田の川の水がにしきに見ゆる事はいかにと下の句にて思ひとかめて扱は(九ウ)みむろの山のみち葉を嵐の吹ちらして此川へながするゆへにてこそあれと訳し侍らは本意にかなひ侍るべし後拾遺集秋ノ下に此哥あり九月のすゑつかたの風のあした立田川を見る心ち能々わきまへしるへし

⑤心にもあらで憂世の事 三条院

心にもあらで憂世にながらへは恋しかるへき夜半の月かも

此帝は人王六十七代にあたらせ給ひて侍る冷泉院第二皇子にて十一才にて東宮とうぐうに立給ひ三十六才にて御位みゐにつき給ひけるか御目(十オ)を煩わづらはせ給ひて御位をさらんとおほしめしける此此哥をよませ給ふ誠にわづか五年の御在位ございにて禁中の月を見すて給ふいかはかり恋しくおほしめし行すゑのほどもわりなく御名残もおしくおほしめすべきにこそ其心を能おもひ入て此御哥を見るへしとつたへ侍る卒そこつ忽とつに後拾遺の詞書など見侍らばさやうにも心得て道を失うしなひ理をくろふする族多かるへしまづ天子の御位ををりさせ(十ウ)

挿絵第三図(十一オ)

「高砂の尾のへのさくら」

挿絵第四図(十一ウ)

「みむろ山たつた川のけしき」

給ふ事をしくおほしめしておなし雲井の月影をだに禁闕に御覧あ



ると院中に見給ふとをかくべつにおほしめしわつらはせ給ひて御行末の事など貪着とんちやくし給ふやうに此御哥を訳し侍るはあまりに無下に浅ましき事也されは天子の御位をのがれさせ給ふ事は御足にかゝりしわらぐつをすて給ふやうにおほしめす事にて既脱履すでたらふくの天子と申奉る事をしらずやもし又其訳したることくに御位に貪着とんちやくの天子ならばならび(十二オ)なき後世迄御名をながさせ給ふ事すでに天下のみたれ人民のなやみ軍書ぐんしょのはしくにも見覚へ侍るべし中く此帝におゐてさやうの御貪着とんちやくはきこへ奉らず後拾遺にも百人一首にも院としるし奉りし所にて能々心得へし月のひかりのくまなきごとく四海をおさめ給はんにも御目をわづらはせ給へば天位にかないがたくすてに御位をのがれ給ふ也され共御命もつれなくて心の心にもあらでうき世の中を過給は、月こそ恋しから(十二ウ)め御目もくらければ月のみちかける有さまも御心のうちにのみをしはかり給はんとの御心成べし能々聖意をわきまふべし

(七) 春の心はの事 在原業平

世中に絶て桜のなかりせは春の心はのつけからまし

詞書になきさの院にて桜を見てよめるとあり春は花を愛し秋は月をもてあそぶならひなるに此哥桜を見て世界に桜といふものがたへてなくなりなば春の心がしづかにあらふとは情なきやうにきこへ侍る

(十三才)

さいへば世界に桜がなくなれかしとねかひたるやうなれ共全花を愛しすごしたる哥也ずいふん情もありあつてことばもめてたき哥也成ほど春になるより遠山の雲をまがい野なる草芽につけてもやかに花のさけよかしと明くれ心をくらしめ咲出るより扱も桜こそ咲たり其こずゑ此しづえのつほみも翌はひらかんけふは匂ふよなんど、思ふにや、花の最中と成けるに又此花をいかなる風の吹ちらさんもしは雨のそ、(十三才)ぎ色やうつろはんと扱も花ゆへに春の心はしばらくもやすからすものいそかはしう暮す一向桜といふものなくは咲ておもしろき事もしるまじ勿論ちるををしむ事も有まし桜といふものをしりたるうへの心づかいにてこそ侍れと理を打かへして詞をならへ内に情の花かほりて外に風をふせぐたくひかならず世界に桜か絶よがしとねがふ心にはあらず

(八) 久かたの雲の事 太政大臣忠通公(十四才)

詞花集

和田の原漕出てみれば久堅の雲るにまかふ沖つ白浪

此哥船をいはすして舟の心あり又白波は盗人の事也甚歌の心むつ

かしく侍る

いかさま緑林白波といふは盗人の事をいふなれ共爰にてそれに取付ては無益の鑿をうがつたぐひぞかし又舟の字をいはで舟に聞ゆるといふもいな所に心をつけて哥の理を失ふ是は海上眺望といふ題にて崇徳院のよませ給ひける時忠通公にもよみ給ひける哥也うみのほとりをはるかに見るといふ題(十四才)なればはしめより船の字にか、はり給ふべきやうなし俗説のことにいは、船か舳に成て海が用に成べし扱は己か心ほどならでは見へぬもの故此歌に舟の字のなき事を訊し侍るは近比愚也忠通公程の哥人が題にある海を用にしてあらぬ船を舳にし給ふべきかかたはらいたき事とも也誠に此忠通公と申は古今にすぐれ給ひし忠臣也四代のみかどの関白にて撰政も二たひにて太政大臣に成給ふそも、此太政大臣の御事は四海を掌にをさ(十五才)め給ふ御事にて其御器量の人なき時は即闕也と申て即闕の官と申すか、る御身のうへをなぞらへ給ふに雲井にまがふ沖中の波にたゞ一艘こぎ出したる船のことくいかなる風の吹きらんもおほつかなし天下の人此人をか、みとして善悪をさだむる事世にも大切の御事也かく御慎ふかくおはしまして御身のおごりをしりぞけ民をあはれみ君をたすけ給ひしめてたき忠臣のか、みひとへに此御歌にてしるべし(十五才)

(九) いでそよ人の事 大弐三位

後拾遺

有馬山いなさ、原風吹ばいでそよ人をわすれやはする

此いでそよ人とは是当人と書り哥の心はかれくゝなる男の女の心をうたがいてとかく物せしをかくよんでこたへけるいかにもそなたの心の風の吹次第にてこなたの心もかはる也人を思ひ人をわする、もみな人のしむけやうによると訳し待るいかさま手にはをまはしたる哥なれば人をわすれやはするといふを人を忘るゝと俗説に訳し待るも例の族の(十六才)所為也忘れやはするはわすれはせぬといふ事也いではをのれををこすの詞としてそよとつゞきたる詞にあらすいで人をわすれふかなんのわすれふぞといふ事也そよはさ、はら風吹はにかけたる下の句のかけ合也かならず是当人信用しかたし田舎沙汰にて待る惣して人倫のまじはりといふ物は他がわすれふは我もわすれん他が思はゞ我も思はんといふは実の道にあらず殊更恋の本理といふはすてらるゝ男を猶しのひて思ひうらみのすゑ(十六才)

挿絵第五図(十七才)

「三条院」

挿絵第六図(十七才)



「大貳の三位かれくゝなる男の哥を見給ふ」
も君にむくはん事のかなしきなど、かこち待るこそ女の道成へきにそなたの心の風の吹次第にてこなたの心も違ふなど、は浅ましき女の心そかし

④雲の簾手の事 読人不知

古今

夕暮は雲のはたてに物そ思ふ天津空なる人をこふとて
簾雲といふは世の変の時出る雲なるにそれに思ひくらべて夕くれこ
とに人を恋すると訳し待る猶又読人不知の事いつれの撰集にも多く
有事いかに其作者のしれさる(十八才)事にや
雲の簾手のやうに物そ思ふといふは御即位の時諸陣にたつる簾のこ
とくの雲夕日ののちには空にみゆるもの也とかくは雲は様くゝのす
かたありてつきぬものなれば人を恋したふ心のごとくにてこそあれ
といふ心也下の句にあまつ空なる人をこふとて又人こふる身とも異
本にあり我よりは高き人よしは及ひかたき恋にてこそあれをよば、
恋はかなふて是ほとに物は思ふまじきに扱も我こふる人は(十八才)
此界の人ではない天津空なる人にてこそあれさあれは一しほ夕暮ご
との空をながめてさまくゝの簾の手のごとくに心をみだす也はたて
と吟ずる所に少巨細有へし雲の簾手を不吉など、いふは田舎沙汰に
て待る又読人不知といふには五品有事也貴人いやしき人仏神勸勤の
人真実に名のたしかに知ぬ人也

⑩我世のいたくの事 藤原仲文
拾遺集

有明の月の光を待ほとに我世のいたく更にけるかな（十九才）

詞書に冷泉院の東宮におはしましける時に月を待心の哥をのこ共のよみ侍りけるにとあり哥の心は在原業平のよめる大かたは月をもめてし是ぞ此つもれば人の老となるものといふ歌の心と申し事にて有明の月になるころと人の老はてたるとはかはらすくらへ合せたるものよと申つたへ侍りぬ有明の月といふは一夜ありあくる月ゆへにかくは名によふといへり又詞書の東宮のさたまちくくに田舎にてときまどはせ侍る也此義共いかゞ（十九ウ）

いかにも此哥の註記に業平の大かたは月をもめでしの哥を引合せ侍る事かくべつにあやまりは有ましさりながら心ははるかにかはるへしさやうに引哥をたつねて哥を註記せば入ほがになり中く心あきらかにすむまし事により引歌を以て訳する事も侍れ共此哥ならば此哥一首の心を発明有べし詞書の冷泉院と申奉るは人王六十三代の御門にて村上天王の御子也則天子の院号のはじめ也扱東宮と申事は天子の御子あまたをはします（二十才）中に御器量を御見たてあつて親王の宣下あるなりその親王宣下のある中にて又御器量をすぐり奉りていかにも御仁徳のおはしまして万民を撫育し給はん御かたを東宮の宣下あつてやがて天子になり給ふ也かるくしく天子の御子なればとて親王ともまして東宮など申奉るにあらずおほく親王の宣下だになく何のみやかのみやと申て過ぎ給ひたる御門の御子ありすでに高倉のみや茂仁王は三十才のうへまでも親王宣下なかり（二十

ウ）しゆへ源のよりまさをめして御むほんのおこされたりこれらにて親王東宮の御事よくくわきまへしるへし此哥も冷泉院のいまた東宮にておはしましける時仲文伊賀守にて参りける折からよみける哥なり扱有明の月の事は十五日より後の月をいへりとはいへ共大江匡房卿の説には十五日より廿日迄の月にはをのく其名あり廿日過後あかつきかけていづる月を有明とはいふよしかつ又旧老法印の作桂明抄にも廿日よりのちの月を有明（二十一才）といふよししかれば此説くにしたがひて此哥をも見るべし扱光を待ほどのほどの字はやうにと見るへし光を待やうに也我世の世は夜といふ心とかね合せて見るべしいたくは俗言のいかうといふ心にて歎息とてさつてもいかう我身のよはいもかたふきけるといふ心なりかやうに訳し侍らば心へまどふまじき事をあらぬ引哥をもとめてむつかしくさたし侍るは大き成あやまりなり

⑪声きく時ぞの事 猿丸太夫（二十一ウ）

古今

奥山に紅葉ふみ分なく鹿の声聞時ぞ秋はかなしき

此歌秋はなべて物かなしき時節にいひならはせり誠に春の空の花やかなるとはかはりて物わひしく悲しき也さればおく山に紅葉のちり敷たる比鹿の打侘て啼たるを聞たる当意たちまち秋の感情おこりて読る哥也かやうに心へて哥を見れば時ぞの字秋はの字気味ふかく面白しと訳し侍るはいかゝ

いかにも大かたにいひまはずといへ共みな田舎のさたにてこそ侍れ

惣して此哥にはいろ／＼の(二十二オ)事を訳して人をむつかしくまどはせ本理にうとく横筋へやりほがす也端山のもみぢはとくちりて奥山のもみぢのちる時分其かけを鹿のたのみて啼といふは大きなあやまり也其子細は紅葉は奥山よりちり端山がをそくちるものなり又庭などにあるは山よりは猶後に色付てちるものなり花は又もみぢにかはりて端山より咲次第に山ふかく咲待る也源氏物語にもかやうのたくあおほくあるなりかならず奥山のもみぢがおそくちると心へ待れば大き(二十二ウ)なるまどひを得て哥の理にかなはず時ぞのぞ秋のはをおもしろきと訳するはをのれが小き心に対して哥一首の玄妙を知す秋はかなしきといふは勿論かなしき心もあるべし又おもしろきといふ心もあるへし此秋は世界の秋也鹿のこゑきく人にかきるべからずさればかぎりなき余情

和歌俗説辨卷上終 (二十三オ)

和歌俗説辨卷中目録

- ① 此たびはの事
- ② 神代もきかすの事
- ③ あしのまる屋の事
- ④ いなはの山の事

⑤ みしき葦の事 (二オ)

⑥ 瀧川の事

⑦ 泉川の事

⑧ ふれる白雪の事

⑨ さねかつらの事

⑩ 風のかけたる柵の事

⑪ しづ心なくの事 (二ウ)

和歌俗説辨卷中

① このたびはの事 菅家

古今

此たびはぬさも取あへず手向山紅葉の錦神のまに／＼

此哥北野聖廟の御哥なり御名をしるし申さざる事子細いか、又此たびはのたびを度又旅とさたし侍る此ふたつの内いづれか哥の本理に叶ひ侍るにやぬさは幣帛の事とやしろきものをもみぢのにしき神の随意とはいふかしくこそ侍れ殊に古今集鞍旅の部に此哥ありて詞書に朱雀院なら(二オ)におはしましける時手向山にてよみ侍りける菅原朝臣とあり朱雀院と申はいづれの御事にや代々の天子のすべらせ給ひたるを朱雀院と申とこそうけ給りつたへしが是又いぶかしく候へ又四位の人をこそ朝臣と申よし三位よりは公卿にて何の卿と申とかやすてに天満天神は道真公と申て宇多のみかどの侍説にて昌恭二年二月十四日に任二右大臣一給ふ事諸書に出たりさるを菅原

朝臣としるし又は管家とばかり申事いか、(二ウ)

不審の趣きいづれも尤にこそ侍れ成ほど此哥は天満天神の御哥也扱菅原といふは天穗日命十四世の孫野見宿禰に土師姓を賜りて十一世の間は土師といひしが十一世の古人天平元年六月廿五日に改て菅原姓を給はり其後は菅原と申也扱古人の御子を清公と申清公の孫を参議従三位是善卿と申此是善卿の御子が道真公にて天満天神也いづれも是迄は御官位ともにひきくおはしまして道真公右大臣にはしめてのほらせ給ひ御家(三オ)を引おこさせ給ひけるゆへ御名を申に及す菅家と称じ奉る也又菅原朝臣とはかり申事は姓の朝臣名の朝臣と申て少差別あり名の朝臣と申は四位の人を申也古今集にしるしたるは姓の朝臣といふたくひ也猶子細有事也又古今集の詞書の朱雀院の事空にてとなへる時はしゆしやくみん又哥書にてはすさくみんとよむがならいなり成ほど累代後院を朱雀院と上古は申奉りしかども六十一代承平帝に追号し奉りてよりの(三ウ)ちにはさは申さす古今集にいふ朱雀院は五十九代の宇多帝の御事なり宇多帝の供御に参り給ひし時の御哥なり扱ぬさは帛にても錦にてもきりて神に奉るゆへもみちのにしきをおほしめしよらせ給ふ也たびの字の事旅の字に見るはよろしからす度の字に見るへし御幸の供奉の時節なるゆへ私の幣帛はさ、げぬなり折ふし山のもみぢのにしきを其ま、手向るといふ心也神も仏も人のす、めぬものは領せられぬほどに(四オ)かく手向て神の御心にもみちをまかせ給へといふ事なりかりそめの心に見るへからず奉公の道からは私をかへり見ぬといふ所殊勝也此神は手向山の道祖神に御幸の道をまもらせ給へといのり給ふ事な

り或抄に供奉をつゝしむは義也神に手向るは礼也礼義の二つそなはりて菅家の御詠にしては尤感あるもの成へしよく味ふへしと書たり是ことほりに似てさにてなし平人の読たる哥に是ほと心の心あらばさやうに註詠を付べし(四ウ)

挿絵第七図(五オ)

「寛平の御時に手向山御幸」

挿絵第八図(五ウ)

「なりひら東の宮にて屏風のゑ見給ふ」

申もおろかや本朝の文祖日本第一の忠臣すでに神とあがめ奉る菅家の御詠にことやかましき註詠也惣して古き哥古き文章を見るとても其人の一生の行跡を見てきたすへき事也大学の八条目にそれく人にあて、構訳せられし大儒ありこれ尤成事なり聖人のうへからは一方はよきが一方はあしきといふ事なし礼にかなひ給へば義にもたがはず是聖人のうへ也礼はあれ共義にかなはずといふは凡夫の事ぞかし殊に哥の註詠を(六オ)いりほがにいへばもとをわすれて浅



ましく書なすもの也己くが心ほどに見へて菅家の御哥の事をわすれけるぞおろかなれ扱此手向山は大和也東大寺のほとり也

㊦ 神代もきかすの事 業平

古今

千早振神よもきかす立田河からくれなゐに水くゝるとは

此哥九月のすゑ十月のはしめつかた立田川のながれも見へぬ迄にちりしきたるもみち水はくれなゐをくゞるやうなる此おもしろきありさまは神代にもきかす神代にはさまく(六ウ)の神変ふしぎなる事もありしかどもかゝる形躰は神代の書にもせすといふ事にて外に心あるへからすこれをながくと辟案をつけていひまきらかすは浅ましきよし扱ちはやふるは神とつゝけたるまくらことばとさたしてさまくの事をいへりまづまくらことばといふ事はいか、いかに(注、改行なし)も哥の心は右の通にて外にまどひをもとむる事有べからず扱哥にまくらことはあることは人の氏姓あるに同じ氏をきゝてよぶ名のながきがごとく古き哥の(七オ)たけ高きこゆるはおほくはまくらことばををき又は序よりつゝけたるがゆへなり扱ちはやふるとは千劔破又千磐破などかけるによつて天照大神の千のつるぎをやぶり給ふ事とも又千の磐をやぶり給ふ事ゆへといへる説もあり或は神は茅の葉ふきたる所に住給ふゆへともいひ又或はかんなぎの服にちはやといふものを着て神のまへに其袖をふるゆへなど、さまくにいひのゝ、しる皆異説にしてたしかならず日本紀には残賤強暴横悪之神と(七ウ)かきてちはやふるあしきかみとよめり旧事紀古事紀には道

迷振荒振国神とかけり是みな邪神の事をいへり此儀によりてさたし侍らばあしき神をさしてちはやふる神とこそいふへけれ共哥のならひはたゞ何となく神とつゝけんまくら詞に用て惣してよき神あしき神おしなへてちはやふるとはつゝけよめる也そのうへ天子をもちはやふる我大君ともつゝけ侍る也是天子は神代の正統たるがゆへ也又ちはやふる伊勢の又ちはやふる加茂のとつゝくるも神(八オ)のみます所ゆへ也され共伊勢加茂の外にちはやふるとつゝけたる所の哥作例をかきす畢竟ふるき詞にて神とつゝくるまくらことばと心得べし

㊧ あしのまる屋の事 大納言経信

金葉集

夕されは門田の稲葉音つれてあしのまるやに秋風ぞ吹

此哥田家秋風といふをよめるよし或抄のおもむきにてはまづ夕ざれに吹秋風門田の稲葉に吹て其後にあしのまる屋に吹やうなりさにて侍るにや又夕ざれの事あしの(八ウ)まる屋の事いか、いかにもさようにはこびよせたる哥の風情もある事にて三室の山のもみちば、たつたの川にてにしきに見るなど、いふ事あり此哥をさように註訳するは浅ましき事也たゞ門田の稲葉に音つる、秋かせかやがてあしのまるやに吹也間もなき躰也人氣もなくさひしき躰をいひたてたる哥也扱あしのまる屋といふ事はあしばかりにてこしらへたる家也惣して一色にてこしらへたる家をたとへば柴(九オ)の屋竹の屋といふなり外のものをつかはすたゞいろいろにてやうくとし

つらふたる屋と心得へしこれもあしばかりにてこしらへたるゆへあ
 しのまる屋といふまろといふはこげやすくいづかたへもまろぶとい
 ふ心なり又夕されは夕暮ともし事ながら夕榮さざれと書にて心得へし夕く
 れのすこし榮はあるさまにてあはれにおもしろき心有べし哥に註訳す
 ればまどひやすきといふは爰の事也門田の稲葉に夕暮の秋風そよ
 くくと音つるゝと聞もあへすやがてあしの(九ウ)丸屋に吹たると
 いへば風に二つのひやうしありていな所へ吟味がかゝる也門田の稲
 葉をも吹秋風があしの丸屋をも一度に吹也註訳をはなれ見るべし

④いなはの山の事 中納言行平

古今

立別れいなはの山の峰に生る松としきかは今かへりこん

此哥五句ながらつゞき過ぬれど秀逸しゅういつのうへは其難なきよしふるくさ
 たこれあり侍りぬ扱いなはの山の事美因幡みいんぱん両国にありいづれか此哥
 のいなはの山にて侍る(十オ)

いかにもいなはの山二所にあり例れいの癖事をこのむ抄物に因幡のくに
 しかるべしとするして行平を因幡のかみにして哥の理をも取あはせ
 て初心の人をまとはし侍る同じ名はむかしよりある事にて物のほし
 くれをのぞきては本理にうとく義も又まぎらしきもの也因幡のかみ
 に成たる行平は此在原行平にてはなし別の人もかならず因幡のかみ
 の行平とおもふゆへいろくくの註訳を付て浅ましき所へをとす也惣
 して松をよむにはむかしより(十ウ)

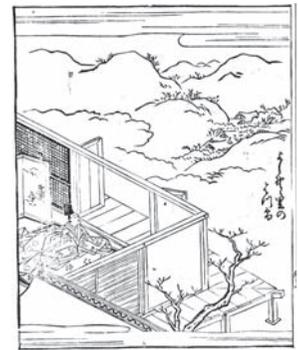
挿絵第九図(十一オ)



「崇徳院きよせいの意」

挿絵第十図(十一ウ)

「よし野、里のはつ雪」



有つけたる松の所をいひ出すが作例さくれいなり人のまつたまぬといふこと
 ばのかよひに松を引出し美濃国のいなはの山は松ある所なるにより
 てよそへてかくよめるなり古今集離別りべつの巻頭にありて部立のまゝに
 て心あきらかなる哥をいりほがにむさくすと註訳をする事浅ましき
 事也俊成卿曰此哥くさり過てよろしからずされ共結句の今帰りこん
 といひながしたる所尤幽玄ゆうげんなりこれにてしたるうへをいかなれば
 外理をむさぼるぞや田舎(十二オ)沙汰といふ物也

⑤みしかきあしの事 伊勢

新古今

難波冴みしかき芦のふしのまもあはて此世をすくしてよとや

此哥序哥のよしみしかきあしのふしのまとはいさゝかばかりといふ

心すくしてよとやとはあはずしてすくせよとのそなたの心中かたとと抄物にありこれかたはしをいひすべらかしてとくと本理にうとくこそ侍れ

成ほど此哥は一首のすかた殊勝なるよし御さた侍りていさ、かの辟案あかに及ぶましき（十二ウ）註訳也まづなにはかたといへる五文字大やうにいひ出たり惣して五文字に君臣くんしんのすかたあるとなり是は君のかたち也ひしといひつめて詮せんになるもあり能々分別すべし哥の本理をいは、思ひそめしより此かたえんをもとめ詞をもつくし心をもくだきあるはたのめてすくしあるは又かけもはなれすして年月をかさねぬれは扱あつかいか、はせんと思ひあまりたるうへに打なけきていひ出したる哥なりみじかきあしのふしのまといふはすべ（十三オ）てあしのふしあいはみじかきものゆへいささかといふ心のたとへにあしのふしのまほどもわすれはせぬと也たとへばつかのまもわすれぬといふごとく草をかりよせてつかぬるあいたをたとゆるこれみな恋に心のやるせなき事をいへり家集にはみじかきあしのふしごととありされともふしのまといふかよろしきよし御さたなり

⑥瀧川の事 崇徳院

詞花集

瀬をはやみ岩にせかる、瀧川のわれても末にあはんとぞ思ふ（十三ウ）
此哥抄物にわれてもとはわりなくしてもといふ詞也岩にせかる、水はわれても末にあふものなれば我心も猶しのぶほとこそ人めも世のきこへも思はめしのひかたくなりまさりなはよし／＼わりなくして

も行末にはあはんと心の心なりとなり是にては何とやら恋哥の本理にそむきてをしつけてあはんといふやうなりあひ見ぬ事がらにて人をもしのひ世にたつ名をはゝかるをこそ恋なれぜひにあふにてあるぞといふ註訳信用しんぎしがたし（十四オ）誠の理はいか、うけ給りたく侍る又瀧川の事いか、

尋たづねの趣き尤也まづ此哥の瀧川のか文字にこりたるがよし瀧川とにござる時は只水のはやき事にて川のながれするどなるをいふ則此哥の瀧川さのごとし又瀧川のか文字をすむ時は瀧と川とふたつをいふ事になりて此哥の理にかなはず扱あつかわれてもとは成ほどわりなくもといふ心也せつなる心也されともわかる、とわりなきとふたつをかねたる心也はやき川の（十四ウ）水はわれわかれてもすゑにはあふてひとつにながる、我はつらき人に別れて後はいかたき心を思ひかへしていへる也あはんとぞ思ふといふうち此心有べし能々工夫くわふ有べし宗祇の註をひたとうつし／＼て後には本にちがいたるうつしあやまりおほく世の人をまどはず抄物あり己が心ほどに義理は見へぬものにて扱々抄物ほとはづかしきものはなし人に別れてあひかたきをわりなく末に逢んと思ふははかなき事ぞと打なけき思ひかへしていふ心也（十五オ）瀬せをはやみ岩にせかる、瀧川のごとく人にさまたげられてぜひなくわかれたる心もあり又我はかならずあはんほとに人にもさやうに思へるときこゆるやうなりわれてもはわりなき心也只今こそ岩にせかる、水のごとくに別わかる、ともわりなく行末にあはんと我は思ふほとに人もさやうに思へといふ心なり

⑦ 泉川の事 中納言兼輔

新古今

みかの原わきてなかる、泉川いつみきとてか恋しかるらん

此哥いつ見んいつきかんといふことはのえんに（十五ウ）泉川とを
けり扱一首のおもむきはいかにと抄物を見るに恋の哥にておもしろ
きといふてしのぶもぢずり住の江の岸によるなみなどの哥にまけま
しきとはかりしして扱もわきへ取てか、りてさら／＼此哥につけ
ての註訳いさ、かも侍らす泉川の事はいか、うけ給りたく侍る

泉川といふ事は山城の国みかのほら瓶原といふ所に川あり外の川とちがひ水
上なくして井のものごとくわきてながる、ゆへいづみ川といへり
さ（十六オ）れども此川今はなし哥の心は我思ふ人あふこともなく
してわする、事なし此わすれぬ心からはいつぞはあふべきはづなる
に扱もあい見る事なしこれほとにあふ事にえんがなくば一向見そめ
ぬはつなるがいかで見そめて思ひこかれる事そ泉川のごとく我なみ
たはどこともなくわきこぼれて袖をぬらす事よされともいつみ川は
見るといふことばかあるが我思ふ人はいつみる事のあるへきとて恋
わたるそ恋しかるらんは我と心をとがめてそこになみたのわくとい
ふをもた（十六ウ）

挿絵第十一図（十七オ）

「山川に風のかけたるしからみ」

挿絵第十二図（十七ウ）

「紀友則の哥の意」
せたり

⑧ ふれる白雪の事 坂上是則

古今

朝ほらけ有明の月とみるまでに吉野、里にふれる白雪

此哥古今冬大和の国にまかれる時に雪のふりけるを見てよめると云々
朝ほらけとは朝朗朝旦且など書り哥の心はよし野の里の白雪を月
に見まかふのよし註訳したる抄物ありいか、

いかにもさのみことほりもあるへきなからさようにいへば雪のふか
くふりつもりたるようなりふか（十八オ）く雪のふり出る事をいひ
たて侍らば里といはずによしの、山といふべし里は山よりも雪のあ
さくふりつもる所なりかならずわけもなき抄物を見れば卒度の所に
本理を失ふ事田舎てんじやのならひなりまづ朝ほらけといふ事は夜の明行時
分なり朝ほらけゆへに有明の月と出したり見るまでにとの文字能々
味ふべし秋より有明の月をみなれたるゆへ今初雪のよしの、里にふ
りわたりて草も木もそのま、すかたのかはらぬゆへ雪で有まい有
（十八ウ）明の月かけてこそあれと朝ほらけのけしきをおもしろく
なかめたるなり秋よりながめし有明の月と今の初雪とをふたつなか



らにほめてよめるなりかならずよしのは寒氣のつよき所なれば雪のふりつもりて一面に白たへなるを月かけに見たてしといへば大き成あやまりに成なり雪のふりつもれば草も木もすがたのかはるもの也さあれば月とは見へす雪なりといふ事はやくしるゝ也くれゝふかさ雪と見るはわるしたゞさつとふつたる(十九才)雪が見なれたる有明の月かとおもはるゝ秋の月のころもはやいつの間にかくれば雪の比に成たるよと底には光陰のうつりやすきを歎息したる和哥也畢竟一と、せの事も月雪にかはり行さまふかくおもふへし見るまでのまではほどゝいふことば也

⑨さねかつらの事 右大臣定方

後撰

名にしおは、逢坂山のさねかつら人にしられてくるよしもかな

此哥のさねかつらをさまゝまきらしき註訳ありさねを実といふ字ともいひ又小寝とも(十九ウ)いひ又人にしらてのて文字を濁もあり又清もあり是等いかゞ

いかにも万葉に人のあひあふはしめをさねそめてといへるを聞はつりてさねかつらに取合せて註すると見へたりまづさねかつらといふは五味子といふ草なり此草茎よりは根のふときものにて葉のしけるものなり扱くきのさきをとらへて引ば根ぎわまたぐりよせらるゝもの也扱あふ坂山にあるものなれば名にしおはゞとはいへる也あふ坂をあふといふえんに取出して(二十才)さねかつらのことくたくりよせなばくるよしもかなよしはきたる由来もがな也がなはずべて

物をねがふ心の詞なり扱人にしらてのてもし清濁両説ありといへ共にごるが能也

⑩風のかけたるしからみの事 春道列樹

古今

山河に風のかけたるしからみはなかれもあへぬ紅葉也けり

此哥のしからみを風のかけたるといふ事下の句のもみちなりけりといふとひとつ事を二度にいふやうにて抄物のおもむきいかにしても(不審なり(二十ウ))

成ほどさやうに釈したる抄物ありずいぶんあしき説也惣して和哥は下の句より読出すもの也さやうになれば上づりて下すばりにて哥のこしをれるものなり和哥をよくよまねば古哥の註もならぬもの也又古哥の心をよくわきまへねばみづからの哥もあよまぬものなりまつしからみといふは川岸に竹にてこしらへて岸ねのくづれぬやうに水のつきあてをふせくものなり古今集の部立のことく秋の末に落葉ひまなくちりみだれて山河の岸ねにとゞま(二十一才)るを見ればいづれもゝ色付てくれなるる落葉かうへがうへ、ちりと、まりてなかるゝ水をふせくはげにも秋の末ふゆをとなりのながめてこそあれ此やうすをいは、しからみに似たりされども人の才覚にてこしらへたるにてはなし誠に風のかけたるしからみにてこそあれと下の句のなかれもあへぬ落葉を上る句にてしかとことはいかに山河の気色をうごきなくいひをふせたり風のかけたるしからみといふが一首の曲といふものなり能々下の句より見るべし(二十一ウ)

⑤ しつ心なくの事 紀友則

古今

久堅の光のとけき春の日にしつ心なく花のちるらん

此哥花のちる事は雨風のわざもしは落花狼藉らうせきの人のわさなるへきに
光ものとかなる天氣に花のちる事いか、又らんとはぬるてにはには
うたかひの文字なくてははねられぬよしき、伝つたへ侍るさるに此哥に
うたかひの文字見へすいか、

いかにも尤なる不審なり春の日かけものとかにて雨風もなきに花の
ちるはいかにと心をおさ(二十一オ)へたるゆへ哥のおもてにうた
がひの文字なきながらはねたるなり是心にておさへたるてにはにて
初心の人能々見おほへ侍るへしかならずうたがひの文字おもてにあ
りといふとも心にしかとうかひ(ママ)のおさへ字なくてははねらるましき
事ぞかし此よき天氣に何とて花はちるぞしつ心なくの心を見る人の
心か花の心かといふ説くありされ共花の心とみるがよししづはし
づかなる心もなくてちるはなさけなしと花をうらみたる哥なりゆう
くとしたる春の末の空の風情けにも見(二十二ウ)るごとくなり
久かたの事は外の所にて註すべし

和哥俗説辨卷下目録

- ① 人を初瀬の事
- ② 古郷寒くの事
- ③ 花さそふの事
- ④ あまのはらの事
- ⑤ 世をうち山の事(一オ)
- ⑥ うつりにけりな事
- ⑦ かたみに袖をの事
- ⑧ のちの心の事
- ⑨ 目にはさやかにの事
- ⑩ てる月なみをの事
- ⑪ 宵なから明ぬるの事(一ウ)

和哥俗説辨卷下

- ① 人を初瀬の事 俊頼朝臣

千載

うかりける人を初せの山おろしはけしかれとは祈ぬ物いのちのを

此哥の抄物を見るに何とも自得じとくせぬ人の註したると見へて何とやら
まきははしく書なし侍りぬ定家卿近來秀哥にいふ此哥は心ふかく詞
心にまかせて学ふともいひつゞけかたくまことに及ふましき姿なり
と書り是は此哥の註釈といふ物にあらず近來秀哥にある事なれば註

和歌俗説辨卷中終(二十三オ)

者のことばにてなしとくと哥の心を得心(二オ)しかたき故古人のことばを取出して抄物にしるしぬされば何といふ哥の心やらむつかしき所をとびこへて外へとつてかゝる事まづ哥道の趣きにあらざるによつて其抄物を見るにたらず子細はいかゝ侍るやらんいかさま近年むさゝくと哥書に註釈をして世に流布させ人をそこなる己を忘るゝ族あり善をすゝめ悪をこらすより外に道はなきものを秘事伝授をこしらへ人をかすむる事以外成所為ぞかしされば此哥は詠歌大概に(二ウ)てもまたある事なりいのれどもあはざる恋といふ題をよく読給ひたる哥なりまづ初瀬に恋をいのりたる事は住吉物語にあり此物かたりはすいふん古き物かたりなるゆへ後世証拠にとりて哥にも作例に用ゆる也扱はつせは山中にて嵐はげしき所也さるによつてはげしきといふ枕こと葉にはつせの山おろしとをきたり恋こかるゝ心のせつなさはつせにいのれともゝ人の心のやわらぐ事もなくはげしくつれなきは何事ぞや(三オ)扱もうあつらぬ人をはつせの山おろしのごとくはげしかれとはいのらぬが是はいかなる事ぞやものをといふより上の五もじへかへして見るべし称名院の仰せにはいのれどもあはぬ恋の題をやはらげていひたると心得よと也誠に詞すくなにてよくきこゆる註なり

◎古郷寒くの事 参議雅経

新古今

みよしの、山の秋風小夜更てふる里寒く衣うつなり

此哥の註釈にみよしの、山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさ

るなりといふ哥を書付(三ウ)て外に何のさたもきこへ侍らすいかゝいかにもみよしの、山の白雪の哥詞つかい似たるゆへにさやうに書付て註釈をまきらかして田舎の人をまどはすと見へたり惣してふるさと、いふ事己が生国をいふにあらす哥によむはみなふるき都の事なりかならずかやうの所にて心も詞もまきれるもの也よしのは天武天皇しはらくながら皇居成し所ゆへふるさと、いふなり其外歌によむふるさととはきはまつたる所の数ありてむさとふるさと、(四オ)は読す哥の心はみよしの、山の初秋の風もひたと夜をかさね吹てすでにいま晩秋の比なればころもうつをとも寒くきこゆるなり小夜ふけてと爰にいふはこよひ一夜のふけたるにあらすいく夜もゝふけて又秋もふけてといふ事なりふるさとのむかしは皇居にてありければさにもぎはしき所も今は皇居ならねば物さびしくころもうつをとものものにまきれす秋のすかたをいとゝおもはするよといふ事なり晩秋とふるさと、の余情さしも(四ウ)

挿絵第十三図(五オ)

「まさつねの哥の心よし野ゝ里」

挿絵第十四図(五ウ)

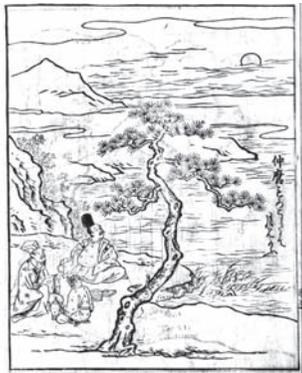
「仲磨もろこしにて月見給ふ」

あはれふかくきこゆるなり

◎花さそふの事 入道前大政大臣

新勅撰

花さそふ嵐の庭の雪ならてふり行物は我身なりけり



此哥は落花をよみ侍りけると詞書にありしかるに田舎のさたとして
我身の老行事をあなちちよみて花のちる事をつぎにせり庭上の花
の雪とふり行を見て此嵐の庭の雪ならで外に又ふり行ものは我身ぞ
と観くわんしたると註せりいか、

成ほとさやうにもいは、いはるへき事なからいな所(六オ)に註釈
をくはへ侍るゆへ嵐にちる花と庭の雪とふり行我身と三つになりて
やかましく侍るなり惣して作者の老若らうじやく又官位くわんいを見る事一大事なり
それゆへのちには大納言に成給ひし御かたも中納言の時よみ給ひた
る哥には其ま、中納言としるし四位の人三位になり給ひても四位の
時の哥に何の朝臣としるし侍るなりそれゆへ詠し給ひたる時の事を
思ひやりて大かたにも註釈を付るものなるにそこへはかまはずにむ
さくと抄物を作る事(六ウ)浅ましき事也まづふり行ものは我身
なりけりといふことは若年の人のよむべき哥にあらずされば入道前
太政大臣とあり是は今の西園寺殿の御先祖公経公の御事也入道の事
太政大臣の事くはしく官職田舎辨疑にしるしをき侍れば今爰に略す

る也これほどの極官をきはめ給ふ御身のうへに何をのそみ給はんや
たる事をするは賢人けんじん也嵐の庭の花も雪も我身も世にふり行事でこそ
あれといふ事也哥の註はずいふんみしかくてきこゆるもの也あら
(七オ)ぬさたをもとめるは辟事ひかごとぞかし

④天の原の事 安部仲磨

古今

天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出し月かも

此哥古今羈旅きりよ卷頭にありて仲磨もろこしにわたりて帰朝の折からよ
みける事諸書に出たりされともあまの原の事ふりさけ見ればの事何
ともさたなしいか、

いかにも近年の抄物は古き抄物をとりにて板行するによりいつれも同
し事にて大きにあやまりたる抄物あれどもそれを吟味に及ばず(七
ウ)すぐにそのちがいを手本にするによりひたとあやまりおほくし
て人をまとはす事おそろしき事也天の原といふは畢竟天の事也しか
るに原の字をつけていふはいかにされば原はひろいといふ事なり天
は地よりも大きにひろきものゆへ其心にて天の原といふ也ふりさけ
みれば手裡てのうらに三笠山が見ゆるといふ事也ひたすらならの京の時分な
れば都を思ひやりて幽かすかなるといふことばをもたせて春日かすがなる三笠の
山に出たる月であるあまの原(八オ)のはるかなる中なるさとの
みかさ山を出し月こそかくれなしといふ事なり眺望てうぼうの部に入べき所
に羈旅きりよの部に入たるにて一首の意味心得有べし

⑤世を宇治山の事 喜撰法師

古今

我庵は都のたつみしかそすむ世を宇治山と人はいふ也

此哥宇治山は都の辰巳にあたれば都のたつみとはいへりしかぞすむとは辰巳よりのいひくだしに鹿ぞすむ鹿は妻恋ふこ糸の物かなしくあはれるものなるに我庵（八ウ）は此あはれをもとめすして得たりといふ哥のよし田舎にてさたありいか、又いふなりのてにはいか、

さてく以外の外なる註釈かないかにも都のたつみといふは宇治山の方角をさしての事也しかぞすむといふは鹿ぞすむにあらず然ぞすむ也然とはかくのこことくといふ心にて世の人はうゑくとはいへども我は都をはなれてうち山にかくのこことくすむなりといふ哥也人はいへともといふへき所を人はいふなりと大やうに下の句を（九オ）とめたりこれらよくく心得有へき事也

⑥うつりにけりな事 小野小町

古今

花の色はうつりにけりな徒に我身世にふるなかもせしまに

此哥に表裏の心ありといへ共其説くわかれすしてすいふんまきはしき註釈あり表裏の心といふはいかに又此哥にの字四つあれどもくるしからぬよし又宗尊親王の御哥に白雲のあとなき峰に出にけり月のみふねも風をたよりにとよませ給ひけるを定家卿のの字あまたさし合候との難これあり（九ウ）

挿絵第十五図（十オ）

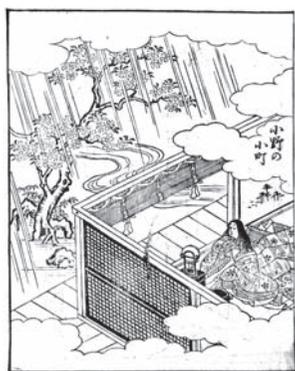
「うち山きせん法師の庵」

挿絵第十六図（十ウ）

「小野小町」

小町の哥のの字はいかにくるしからざるぞや定家卿の時分より同し文字のあまたある哥をきらい給ふにや上代は其さたなきゆへ小町の哥はくるしからぬにやいか、

尤成尋也惣して和歌に病ある事初心の人もそれく聞おほへて侍る事なりたとへは四病八病をのがれてよみ出したる哥の人のをしゑにもならず己か身のおさめにもならざるはたごとといふものにてことばをならへたるぶんにて何のやくにたす又病あるといふ哥にてもしかと（十一オ）観善懲惡のをしゑとなる哥は病にをかされずといふてくるしからす心もよきうへにすがたのやさしき人はいふに及ずいかにすかたかたかよきとて心ざしのあしき人は世のはづかしめをうくるもの也いかにもかたちのふつ、かなりといへとも心の



かしこき人は世のおほへもあるそかし小町の哥にの字あまたあれども
すいふんの哥にてすかたにかゝはる事にあらず又白雲のあとなき
峰の哥はそれほどになきゆへにの字のおほき事を定家卿の難じ給ひ
(十一ウ)ぬ扱表裏の心といふは成ほど古来よりきたある事なり三
条西右府公条公の仰せに古今集一部の内小町か此哥を第一とおほし
めすのよし此哥の表の義といふは春にいたりて花のさかりには花に
身をなさんとかねて思ひしも世のまじはりにうちまきれてすごした
る心も見ぬ花なればうつりにけりなとさつしていへり又裏の説とい
ふは我身のおとろへを花になぞらへて歎息したる心也なかくらし
つはとやかくと物を思ひて打なか(十二オ)めたる也惣して見ると
いふとなかめるといふは大きに違ふ事なり俗説にながめるといふは
ながう見るといふ事也といふもあやまりなり和哥によむなかくめると
いふは皆ほどへたる事也いつれの哥にてもほどへたる事になかくめ
いふ字を見るべしかならず見るといふ事と心得侍れば大きに本理を
うしなふ事也扱為氏の仰せには此哥のながめに雨をそへてふかく見
よと教訓せられたるなり花時風雨多といへばなり

⑦かたみに袖をの事 清原元輔(十二ウ)

後拾遺

契りきな形見に袖をしほりつゝ、すゑの松山波こさしとは

此歌の詞書に心かはりて侍りける女にいひやりける人にかはりてと
ありいひかはしたる女の心たがいぬるをうらむる男に元輔のかはり
てよみたる哥成へし人にかはりて哥をよむ事はある事なれば不審な

ししかるに男の心に女のかはりたるをうらみてなげくなみたに袖も
かはかずふししづみてやうく我なみだを女のかたみとおもふやう
にきこゆるなり又松山のすゑを波のこすともと有べき所を末の松山
とよみし(十三オ)はいかゝ、

成ほどあしく心得侍れば哥の本理をうしない註釈にて一首がふしく
れだつものなりたつねの趣き哥の理にかなはずまづかたみといふは
世にいふわすれかたみなどゝて取かはしたる心にあらず此歌のかた
みといふは互といふ字にてたがいといふ事也扱末の松山といふは
奥州にもとの松山中の松山末の松山といふ所あり末の松山は海より
遠ければなみのこす事はなきなりまづ五もじより註すればちきりき
など(十三ウ)いふは男と女とはしめにけいやくの仕様はといふ事
なりかたみに袖をしほりつゝといふはたがいにかはるまいかはらじ
と誓ひをたて合なみたをこほしていふやうはといふ事なり扱その誓
のうへにてたとへを出していふやうはもとよりなみのこさぬ末の松
山なれども万一此末の松山に浪のこすやうにならば心のかはる事も
有べし中くたがいの心は何とてかはらふぞよもや末の松山は浪も
こすまじそのことくにたかしの心はかはるまいとたとへまで出して
いひかはした中なる(十四オ)にいつのまにか女の心のかはりたる
は何事ぞやとてこさぬ末の松山に波こさしなどゝはちぎるまいに
扱もくやしやと女をうらみ其うへにていひかはせし時のたとへまで
を男のかこつ心なりその男と女のかくのことく末の松山の事をいふ
たにもせよいはぬにもせよかはらぬ心とたのみたる女のかはりたる
うへなれば元輔思ひやつてよめる哥なりかはるまいといふたとへに

末の松山波こさしといふ事はふるくいひつたへたり作例をいはゞ万葉に君をきてあたし心をわが（十四ウ）もたば末の松山波もこへなんといふ哥ありいよ／＼後世男女のかはる心を末の松山波こゆるといふなり

⑧のちの心の事 権中納言敦忠 拾遺

あひ見ての後の心にくらふれば昔は物を思はさりけり
此哥むかしは思はねともかくあいみての後にものを思ふといふ事にやいか、

いかさま尤成たつねなから俗説にはさやうさたし侍るやらんまづ昔は物をにあらす昔は物も思はさりけりなり哥書の板行のちかいといふは（十五オ）爰也かなにて書たる物ゆへ心やすきものかと思ひ次第にあやまりを註釈して人をかすむる族多し此哥の心は俗説にいふとちかいことの外うへのうへをよみたる哥なり恋したふ身はたとへば一たびあいみなばそれを思ひいでにしてふつ／＼思ひきるへしと思ひしに扱もこよひふしきに枕をかはしけるうれしきよ此うへはかねて思ひきはめたることくにふつ／＼と此恋を思ひきらんとすれば中／＼おもひきる事は扱をき恋しさゆかしさかあいみぬ（十五ウ）

挿絵第十七図（十六オ）

「敏行の哥の意」

挿絵第十八図（十六ウ）

「源順の哥の心八月十五夜」



さきよりも十ばいしてやむ事にあらす今の此心にくらへてはあい見ぬ以前は物も思はぬでこそあれとうへのうへをいひのへたる哥也くれ／＼昔は物をにあらす物も思はさりけりなりをの字ともの字とにて大きにちかいあり

⑧いつれのをよりの事 斎宮女御 拾遺

琴の音に峰の松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけん

此哥の題は白氏文集より出て松風入^{せうふう}二夜^に琴^にといふ事をよみ給ひけるにいつれのをの字を琴の緒^をの字に書たるありいか、（十七オ）
毎度申侍ることく哥をかくにかならずさやうのひがこと多し又はゆへもなきちらし書などをし侍る事扱もはつかしき事なれともそれにてもしらぬうへからはむさと歌をかきちらして無下のふるまいをあらはずなり此哥の心はいつれの山の尾上より吹わたる松風ぞ折ふし琴のねに似かよひて扱もおもしろき夜すからやといふ事なり尤山の

尾上に琴の緒をもたせ合したるとはいへ共それは心にてこそあれ山の尾に緒の字はきやうがる事なり（十七ウ）

⑨目にはさやかにの事 敏行朝臣

古今

秋来ぬとめにはさやかにみへね共風の音にそをとろかれぬる

此哥秋の巻頭にて哥のはよろつもの、きたる事みなめに見へてそれとしらるゝに時節の来るは目にはさらに見へす只其折の天地の気のうつりかはるによつてしらるゝといふ事のよしされども風の音にそをとろかれぬるとはいかゝ承りたく侍る

いかにも哥の心は其心得のことくにて外にかくれたる所なしされども風のをとにそをとろかれ（十八オ）ぬるといふ所にて立秋の心たしかなり成ほど四季ともに時節のうつりかはるは目にみゆるものにあらず何とやらしたる所が春よどやうしたるが秋よとしらるゝ、也しかれは此哥の秋来ぬとを春来ぬとめにはさやかに見へね共とあらば立春の歌にも成へしされ共風のをとにぞをとろかれぬるといふ所にて上の句に取合てしかと立秋の哥也其子細は四季のうちにて春夏のきたるはさしてをとろくほどの事にてなし文月朔日になればはや（十八ウ）今年もなかばくれ過しとをとろく心たしかなり又風の音にとろくと吹風はもちろん風気をおもふべし秋の気は西にはしまりて五行にとりては金也かね人はをそこないやふる性ありされは秋風は吹そむるより人の身にしみ心をいたましむる声あれば風の音にそをとろかれぬるとはいへる也目にはさやかに見へねとも風声思

ひの外なり

⑩てる月なみをの事 源順
拾遺

水の面にてる月なみをかそふればこよひぞ秋の最中也ける（十九オ）

此哥屏風に八月十五夜池有家に人々あそひしたる所とありしかるに月浪をと書たる人ありいかゝ、

以外なるあやまり也いかに水の面にと五文字あればとててる月浪といふ事なし此哥の心はかねて八月十五夜は名にしあふ月なればくまなきかけを見んとおもひ月並をかぞへ侍れば池水にてる月のひかりすくれたりこれは扱もおもへばかねて月並をかそへまちたるこよひが秋の最中にてこそあれといふ哥也（十九ウ）心には浪のふくみもあるへしされとも月並也月浪にあらず

⑪宵ながら明ぬるの事 清原深養父

古今

夏の夜はまた宵ながら明ぬるを雲のいつこに月やとるらん

此哥夏の夜のみしかき事をいはんために宵ながら明ぬるといひしものかよひにはあらねともなるべし外に心も侍るやらん

いかにも大かたの抄物にそれほどの事はしるして侍れども一首の心をまどひて下の句にある月の事を打すて、をくは何事ぞやすなはち詞書にも月の面白かりける夜あかつきがたに読るとあり爰を能々（二十オ）心得有へき事也月の面白きといふはみる人の心に面白き事

あつてか又は見る所の面白きかにていよ／＼月の光りもおもしろきもの也秋の月の面白きといふも野山の気色本草の風情のおもしろきうへにもとより秋は顕なりといふて月の影も殊にあきらかなればいよ／＼月を賞翫する也勿論みる人の心も秋は陰になりてうちつきてみるゆへ也今深養父此夏の夜に月の面白きといふは心に月を面白がる事あつてつれ／＼と月をみしに夏の夜なればはや暁になりたり扱も残念や此面白き月はいつこの雲にやどりて夜は明る事そといふ事也しばらく夏の夜はと云五文字をのけみれば能しる、也(二十ウ)

正徳二年^{壬辰}正月吉日

京寺町松原上ル町

菱屋四郎右衛門板行

(裏表紙オモテ貼付)

〔解題〕

一 作者について

『和歌俗説辨』は無署名本ながら、序には次のように記される(句読点や清濁は筆者による。以下同じ)。

和譚俗説辨序

宵雨軒の竹扉に入て対話の折ふしごとにおなじ心の人々のつどい來りて、それ／＼にたづね侍る趣きを反古のうらにしろし帰れば、書肆の何がし是を乞て桜木にはらんといふ。いくたびか辞しけれどもゆるさず。扉主の思はん所もはゞかりありと尔いふ。

これによると、著者は宵雨軒に出入りする同好の士の一人ということになろうが、宵雨軒とは月尋堂の軒号であり、月尋堂自身が同好の士に仮託・輜晦した自序であったことが推測される。本書は序に記される「それ／＼にたづね侍る趣きを反古のうらにしろし」たような雑然とした私的備忘録的なものではなく、かなり周到に構成されたものであったことが窺えるのである。巻下の「㊦ 花さそふの事」の一部を次に挙げる。

㊦ 花さそふの事 入道前^(ついで)大政大臣

新勅撰

花さそふ嵐の庭の雪ならでふり行物は我身なりけり

此哥は落花をよみ侍りけると詞書にあり。しかるに田舎のさたとして我身の老行事をあながちによみて花のちる事をつぎにせり。庭上の花の雪とふり行を見て、此嵐の庭の雪ならで外に又ふり行ものは我身ぞと観^{くわん}じたと註せり。いかゞ。

成ほとさやうにもいはゞいはるべき事ながら、いな所に註釈をくはへ侍るゆへ、嵐にちる花と庭の雪とふり行我身と三つになりてやかましく侍るなり。……まづふり行ものは我身なりけりといふことは、若年の人のよむべき哥にあらず。されば入道前太政大臣とあり。是は今の西園寺殿の御先祖公経公の御事也。入道の事太政大臣の事くはしく官職田舎辨疑にしるしをき侍れば今爰に略^{りやく}する也。……

まずは傍線部に注目したい。ここで言及される『官職田舎辨疑』(宝永八年三月刊)は序に「北京散人宵雨軒」と署名され、『和歌俗説辨』

の序に記される扉主「宵雨軒」と同一人物であることが確認できるが、「北京散人宵雨軒」こそは月尋堂の別号と認められるべきものであり、これまで別人とされる趨勢にあった浮世草子作者「北京散人月尋堂」と俳諧作者「宵雨軒月尋」が同一人物である証左ともなる。「田舎のさた」と批判される説が北村季吟の『百人一首拾穂抄』（天和元年跋・刊、以下『拾穂抄』と記す）の師説に相当するものであることなどは次章で検証するが、『和歌俗説辨』の構成や本文の編集意図などからも明らかなように、本書の歌学問答は月尋堂の自作自演による韜晦であると見てよさそうである。本書は無署名本ながら、その作者は月尋堂であったことが窺えるのである。

二 本書の内容構成

本書上・中・下三巻の目録に挙げられる項目を通し番号を付して示せば以下のようになる（ただし、巻下本文には目録には欠脱する㉔が重複しており、それを巻下目録の最後に記す）。

- 和歌俗説辨巻上目録
- 1 ㉑ 船をしぞ思ふ事
 - 2 ㉒ かたをなみの事
 - 3 ㉓ 尾上の桜の事
 - 4 ㉔ 三室の山紅葉、の事
 - 5 ㉕ 心にもあらで憂世の事
 - 6 ㉖ 春の心はの事
- 7 ㉗ 久かたの雲井の事
- 8 ㉘ いでそよ人の事
 - 9 ㉙ 雲の旗手の事
 - 10 ㉚ 我世のいたくの事
 - 11 ㉛ 声きく時ぞの事
 - 12 ㉜ 此たびはの事
- 和歌俗説辨巻中目録

- 13 ㉝ 神代もきかずの事
- 14 ㉞ あしのまるやの事
- 15 ㉟ いなばの山の事
- 16 ㊱ みじかき葦の事
- 17 ㊲ 瀧川の事
- 18 ㊳ 泉川の事
- 19 ㊴ ふれる白雪の事
- 20 ㊵ さねかづらの事
- 21 ㊶ 風のかけたる柵の事
- 22 ㊷ しづ心なくの事
- 23 ㊸ 人を初瀬の事
- 24 ㊹ 古郷寒くの事
- 25 ㊺ 花さそふの事
- 26 ㊻ あまのはらの事
- 27 ㊼ 世をうぢ山の事
- 28 ㊽ うつりにけりなの事
- 29 ㊾ かたみに袖をの事
- 30 ㊿ ちの心の事
- 31 ㊿ 目にはさやかにの事
- 32 ㊿ てる月なみをの事
- 33 ㊿ 宵ながら明ぬるの事
- 34 ㊿ いづれのをよりの事

これら三四項目中の大部分は百人一首歌であり、それ以外は1・2・6・9・10・31・32・34の八項目である。その内の9は古今集歌であり、自説の内容は『顕注密勘』に基づいたものであるが、その他八項目はいずれも下河辺長流の『歌仙抄』（万治二年頃刊）に採られた歌であり、自説の内容も全くそれを敷衍したものとなっている。

本書の各項目の体裁は或問形式で統一されており、右の八項目以外の百人一首歌に関しても引用・展開される説はさまざまであるが、質疑に供される俗説としては『拾穂抄』の説が目立って多く引用され、かなり批判的に取り上げられていることがわかる。

- 17 ㉖ 瀧川の事 崇徳院
詞花集

瀬をはやみ岩にせかる、瀧川のわれても末にあはんとぞ思ふ

此哥抄物に、われてもとはわりなくしてもといふ詞也。岩にせかる、水はわれても末にあふものなれば、我心も猶しのぶほどこそ人めも世のきこへも思はぬ。しのびがたくなりまさりなば、よし〜わりなくしても行末にはあはんとの心なりとなり。是にては何とやら恋哥の本理にそむきてをしつけてあはんといふやうなり。あひ見ぬ事がちにて人をもしのび、世にたつ名をはかるをこそ恋なれ。ぜひにあふにてあるぞといふ註訳信用しがたし。誠の理はいかゞうけ給りたく侍る。又瀧川の事いかゞ尋の趣き尤。……宗祇の註をひたとつし〜て後には本にちがいたるうつしあやまりおほく、世の人をまどはず。

抄物あり。己が心ほどに義理は見へぬものにて、扱々抄物ほどはづかしきものはなし。人に別れてあひがたきを、わりなく末に逢んと思ふははかなき事ぞと打なげき、思ひかへしていふ心也。瀬をはやみ岩にせかる、瀧川のごとく、人にさまたげられてぜひなくわかれたる心もあり。又我はかならずあはんほどに、人にもさやうに思へときこゆるやうなり。われてもはわりなき心也。只今こそ岩にせかる、水のごとくに別る、とも、わりなく行末にあはんと我は思ふほどに、人もさやうに思へといふ心なり。次に『拾穂抄』の該当部を挙げる。

瀬をはやみ岩にせかる、瀧川のわれてもすゑにあはんとぞ思ふ
詞花集恋上。題しらず云云。われてもとはわりなくしてもと云詞也。伊勢物語に二日と云夜男われてあはんと云といへるも

なじ。御抄云哥心は岩にせかる、水はわれても末にあふものなれば也。師説序哥也。わが心も猶しのぶほどこそ人めも世のきこへも思はぬ。かくてしのびがたくなりまさりなば、よし〜わりなくしても行末にはあはんとの心也。

両書を比較して明らかのように、月尋堂は『拾穂抄』に記される季吟の自説(傍線部)、御抄として出る細川幽斎の説(二重傍線部)、季吟の師である松永貞徳の師説(波線部)を区別なく一連のものとして批判しており、「註訳信用しかたし」、「抄物ほどはづかしきものはなし」とされるのが『拾穂抄』であることが窺えよう。二十六首の百人一首所収歌について、その批判対象とされている俗説を挙げると次のようになる(数字は前掲目録の項目番号)。

3	特定抄物なし	17	季吟・御抄・師説
4	『拾穂抄』師説	18	師説
5	御抄説	19	季吟説
7	御抄説	20	御抄・師説
8	特定抄物なし	21	季吟・御抄説
11	『拾穂抄』師説	22	特定抄物なし
12	〃	23	『拾穂抄』の注釈態度
13	特定抄物なし	24	〃
14	『拾穂抄』御抄説	25	『拾穂抄』師説
15	師説	26	『拾穂抄』の注釈態度
16	御抄説	27	特定抄物なし

28 『拾穂抄』 御抄の注釈態度か	30
29 特定抄物なし	34

批判対象としての「抄物」がほぼ『拾穂抄』であることが窺えようが、そこには次章で述べるような月尋堂の和学者としての歌学意識とともに、ある種の党派意識が垣間見られるのである。

三 『拾穂抄』批判の背景

森本百丸の『在岡逸士伝』（享保八年成）は月尋堂に関する現在ほぼ唯一の伝記的資料と言つてよいが、そこには次のように記される。

月尋

宵雨軒姓藤岡、名月尋、坂陽之産也。標格不凡、襟懷磊落。少而好「文学」、兼嗜「俳諧」。嘗従「于野田忠肅翁」、読「於源氏万葉等之書」、壯歳而游「京城」、師「青木貞悟」、探「俳諧奥儀」、乃為「座神之同門」。偶依「肅翁之因」、謁「竹内惟庸卿」而学「和歌之道」。……世人嘉「其風流」、感「其逸材」。公卿之徒、亦忘「形倒」爾汝。……欲「為」長頭丸之道統、因「以」家藏之書「讓」尋。惜哉。尋也抱病、卒以「正徳五年末二月廿一日」死。嗚呼天何喪「斯文」。

この記事から、月尋堂の三人の師、すなわち俳諧の師青木貞悟、和学・歌学上の師野田忠肅および竹内惟庸の存在が浮かび上がるが、この証言は月尋堂の和学者としての重要な背景を窺わせるとともに、先の『拾穂抄』批判の動機に関しても一つの示唆を与える。「幽齋—貞徳—季吟」という道統において地下歌学の正統を標榜する季吟に対し、月尋堂が

ある種の批判意識——歌学的に三条西家または竹内惟庸を中心とする堂上家に直接繋がる者としての直系意識、俳諧系譜においては季吟と何かと問題のあった貞室の直系（貞徳—貞室—貞恕—貞悟）に当たり、まさに貞門の嫡伝（「長頭丸之道統」）を継承せんとする者の正統意識、下河辺長流・契沖らとともに師の忠肅が属する、いわゆる黎明期の古学者圈内に連なる者としての伝授批判など——を持ち得ることは十分に予想できるのである。

ただし、月尋堂の伝授批判には留意すべきことがある。次に巻下「○人を初瀬の事」を挙げる。

○人を初瀬の事 俊頼朝臣

千載

うかりける人を初せの山おろしはげしかれとは祈ぬ物を
此哥の抄物を見るに、何とも自得せぬ人の註したると見へて何とやらまぎらはしく書なし侍りぬ。定家卿近來秀哥にいふ、此哥は心ふかく詞心にまかせて学ぶともいひつゞけがたくまことに及まじき姿なりと書き。是は此哥の註釈といふ物にあらず。近來秀哥にある事なれば、註者のことばにてなし。とくと哥の心を得心しがたき故、古人のことばを取出して抄物にしるしぬ。されば何といふ哥の心やら、むつかしき所をとびこへて外へとつてかゝる事、まづ哥道の趣きにあらず。さるによつて其抄物は見るにたらず。子細はいかゞ侍るやらん。
いかさま近年むさくくと哥書に註釈をして世に流布させ、人をそこなぬ、己を忘るゝ族あり。善をすゝめ悪をこらすより外に

道はなきものを、秘事伝授をこしらへ人をかすむる事、以外成所為ぞかし。……称名院の仰せには、いのれどもあはぬ恋の題をやはらげていひたると心得よと也。誠に詞すくなにてよくきこゆる註なり。

ここでも例のごとく『拾穂抄』の注釈態度が批判されているが、注目すべきは、月尋堂がいわゆる勸善懲惡論的文学観に立脚して「秘事伝授」批判を行いながらも、一方で称名院三条西公条の注釈態度を尊重していることである。こうした月尋堂の伝授批判は、これまでの歌学史的通念、すなわち地下による堂上伝授批判という図式からすれば一見矛盾する態度のようにも受け取れよう。しかし、月尋堂にとってそれは矛盾ではなく、「秘事伝授」批判の矛先は堂上ではなく、あくまで地下に向けられたものであった。

此百首に五ヶの秘哥七首の相伝の哥といふ事侍る也。五ヶは両家に有。

二条家 人丸 喜撰 仲磨 忠岑 定家 冷泉家 家持 忠岑
経信 法性寺 鎌倉右大臣

『歌道岸の姫松』(素兄堂止静 宝永二年刊)
一 貞徳流に百人一首に五首の秘歌と申す事申し習はし候。御相伝にも有^レ之事にやと奉^レ尋処に、しらぬ事なりと仰にて、歌はどれどぞと御尋有り。これくの由申上る処、御笑ひなり。

『溪雲問答』(中院通茂述 松井幸隆記 宝永二(一七〇七)年頃の問書)
当時の地下流の「秘事伝授」が堂上のそれとは距離を置いたところで展開していたことが窺えよう。歌学史的に堂上の専売特許と言いつ

わされてきた「秘事伝授」ではあるが、いまや地下と堂上を区別しなければならぬのであり、月尋堂の伝授批判は地下伝授に対する批判と取るべきものであった。「伝授なるものに最高の権威を与へ決して形式的には扱つてゐなかつた」とされる地下人季吟の『拾穂抄』が月尋堂のターゲットとなった背景には、こうした和学者としての複雑な意識が予想されるのである。

注

- (1) 『百人一首拾穂抄』「乙部勘右衛門／川勝又兵衛梓行」(『北村季吟古注 釈集成44』新典社、昭52)。
- (2) 『在岡逸士伝』(『古俳書文庫 第十六編』天晴堂、大14)。
- (3) 『歌道岸の姫松』「宝永二乙酉歳孟春吉辰／洛陽書林中村源七郎／御幸町 二条上二丁目磯田太郎兵衛開板」(『東北大学附属図書館狩野文庫蔵本』)。
- (4) 『溪雲問答』(『日本歌学大系 第六卷』風間書院、昭54)。
- (5) 野村貴次氏「季吟の傳授観―晩年の歌書一二による試論―」(『国語と国文学』第五一卷第一〇号 昭49・10)。

参考文献

拙稿「月尋堂とその周辺 ―その知られざる活動の一面―」(『国語国文』第五九卷第一二号 平2・12)。

(二〇一二年十二月三日受理)
(ふじわら ひでき 文学部日本・中国文学科教授)

本研究はJSPS科研費23520235の助成を受けたものです。